

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2013～2016

課題番号：25705026

研究課題名(和文)戦後大学入学者選抜制度の制度的妥当性を巡る計量歴史社会学研究

研究課題名(英文)Historical sociometrics study about system validity of University entrance system at post WWII

研究代表者

木村 拓也(KIMURA, TAKUYA)

九州大学・人間環境学研究院・准教授

研究者番号：40452304

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、以下の時代の異なる3つの計量社会学研究( )を時系列的に検討することで、戦後大学入学者選抜制度の計量歴史社会学研究を行った。過去の大規模大学入学者選抜制度における学力選抜資料とその他の選抜資料に関する再分析、特に、大規模統一試験として、複数回受験を行っていた能研テストの再分析、過去28年間における大学入学者選抜に関する新聞記事のテキストマイニング、過去20年間におけるA大学のセンター試験と個別試験の寄与率に関する計算(合否入替り率)、大規模大学入学者選抜制度に関する制度運営状況の整理・解明。

研究成果の概要(英文)：In this research, we conducted a study on the historical sociometrics of postwar university entrance selection system by examining three different metrological sociology studies ( ) in the following periods. (1) reanalysis of academic achievement selection materials and other selected materials in past large-scale university entrance selection system, in particular, reanalysis of Noken tests that were taking double examinations as a large-scale test, (2)Text mining of newspaper articles concerning selection of university entrants among 28years, (3) Calculation on the contribution ratio of university center examination and university original examination in the past 20 years (swap rate), (4) Organization of the system management situation concerning selection system of large-scale university entrantce.

研究分野：教育社会学

キーワード：計量歴史社会学 大学入学者選抜 制度的妥当性 テキストマイニング メタアナリシス 進学適性検査 能研テスト 複数回受験

### 1. 研究開始当初の背景

まず、国内の動向としては、2008年12月24日に上梓された中教審答申『学士課程教育の構築に向けて』でAO入試の学力不問になりつつある現状が批判されたのを皮切りに、2010年9月30日に文科省委託研究最終報告書で「高大接続テスト」が提起されたりする(北海道大学2010、佐々木2012)など、現状の大学入学者選抜制度に対する疑義と新たな大学入学者選抜方法及び制度が模索されているのが昨今の状況であろう。直近では、2012年6月5日に発表された「大学改革実行プラン」でも「意欲・能力・適性等の多面的・総合的な評価に基づく入試への転換の促進」が謳われ、同年8月28日に平野文部科学大臣より中教審に諮問される形で、同年9月21日より中教審高大接続部会の第1回が開催されたところであり、応募者も部会内勉強会の一貫として、文部科学省で依頼講演を行った(依頼講演業績1)。このように、大学入学者選抜制度改革は喫緊の課題であると捉えられているが、入試データ本来の秘匿性もあいまって、データに基づいた改革案とはなり得ず、理念・理想論で語られることが多いのが現状である。

また、国外の動向としては、韓国では2015年から2種類の異なるテスト(学術向けと会話中心)を行い、テスト理論に基づく等化技術(equating)によってスコア比較を可能にする英語の新試験制度(National English Ability Test:NEAT)の導入を決定したり(Jin2011)、米国のACTでも8学年から12学年までをモニターし大学進学準備状況を測定するシステム(The ACT Educational Planning and Assessment System:EPAS)を開発したりする(Harris2011)など、各国でも教育測定論の最新技術、及び、研究成果に基づいて、入試方法の複数化や評価指標の多元化を伴う新しい大学入学者選抜制度の導入が図られている。

### 2. 研究の目的

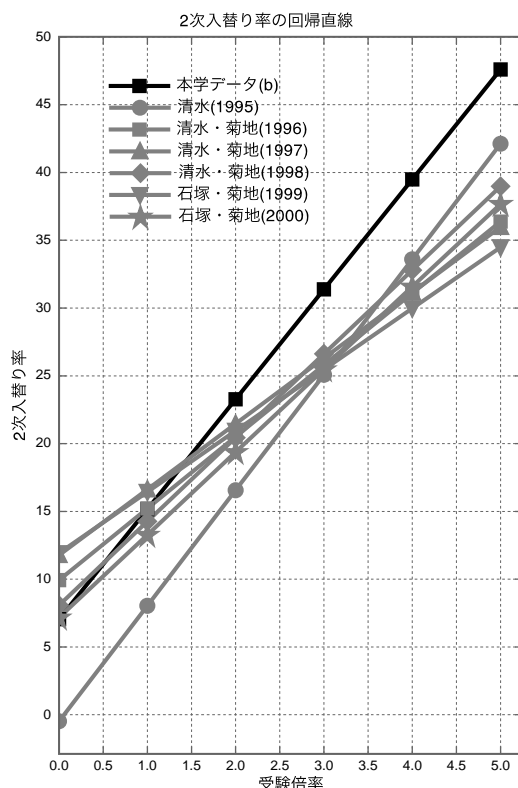
本研究「戦後大学入学者選抜制度の制度的妥当性を巡る計量歴史社会学研究」は、2012年6月に発表された「大学改革実行プラン」での「意欲・能力・適性等の多面的・総合的な評価に基づく入試への転換の促進」という高大接続問題に対して過去の大規模大学入学者選抜制度に関する未公開/未活用データを再分析し、政策に有用な計量分析結果(ビデンス)を提供することを目的とする。その際、大規模大学入学者選抜制度の「内と外」つまり、実施(大学)側から入試制度がどう見えるのか(内側からの視点)、世間が入試制度をどう判断するのか(外側からの視点)に関する計量分析結果を踏まえて制度の実像を歴史的に再構成し、「大学入学者選抜制度の制度的妥当性理論」の構築を目指す。

### 3. 研究の方法

本研究では、以下の時代の異なる3つの計量社会学研究(①②③)を時系列的に検討することで、戦後大学入学者選抜制度の計量歴史社会学研究を行う。①過去の大規模大学入学者選抜制度における学力選抜資料とその他の選抜資料に関する再分析、特に、大規模統一試験として、複数回受験を行っていた能研テストの再分析、②過去28年間における大学入学者選抜に関する新聞記事のテキストマイニング、③過去20年間におけるA大学のセンター試験と個別試験の寄与率に関する計算(合否入替り率)④大規模大学入学者選抜制度に関する制度運営状況の整理・解明、上記に挙げた4つの研究方法のうち、①③④は、過去の大学入学者選抜データ/史料を再分析することで、内部から見た大学入学者選抜の現実を再現するものであり(内側からの視点)、②は大学入学者選抜を取り巻く世論(外側の視点)の時系列での検討である。これらの検討を通して、過去の大規模大学入学者選抜制度が制度として成立/失敗した要因をまとめ、制度的妥当性の理論構築を行う。

### 4. 研究成果

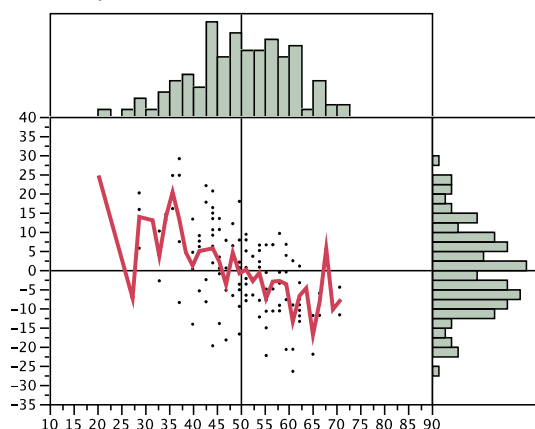
本研究では、過去20年間の合否入替り率の検証を行った。本学データでは、1次・2次入替り率ともに、過去20年間に大きな変化はなかった。また、過去入研協で行われた全国国立大学の調査結果と同様、2次入れ替わり率には、受験倍率が最も大きな影響を与える、という構造に変化がないことも合わせて明らかにされた。以上を踏ま



え、個別大学から見た大学入試センター試験は相当な頑健性を持った制度であると結論づけられる。

また、入研協プロジェクトにおいて蓄積された、1994(平成6)年から1998(平成13)年度まで5年分の分析結果とA大学データの2016(平成28)年度までの15年間の計20年間の分析結果とを突き合わせて検討してきた。その結果、第一に、主成分分析や共分散構造分析において、「受験倍率」が高くなった場合、「2次入替り率」も高くなり合否に2次の個別学力検査に大きく影響を与えていることが明らかとなり、改めて、2次重視の入試データの構造を持っていることが定量的に確認された。第二に、重回帰分析において、「2次標準偏差」が小さく(大きく)なる場合、連動して「1次入替り率」が高く(低く)なる入試データの構造が明らかとなった。本学入試においては、「受験倍率」もさることながら、2次で得点差のつく問題を出題するか否かが、2次逆転を許すのか、1次逃げ切りを許すのか、といったことにつながり、本学の学生母集団の形成に大きな影響を与える構造になっていることも定量的に確認された。第三に、正準相関分析では、「1次標準偏差」と「1次と2次の合計得点の標準偏差」が同じ成分上に負荷しており、1次の得点差がそのまま合否を判定する合計得点のバラツキに直結している学部が存在しているということが示唆された。

また、臨時教育審議会から議論が繰り返されてきた大学入学者選抜制度における「複数回受験」について実データで分析した。「複数回受験」の是非を吟味する分析視角は、「複数回受験」した場合、1. 入学者選抜が総合順位で決定されるため、その成績間において相関関係が担保されているか否かの検証(順序性の評価)、2. 得点変化がみられた場合、それが真に得点の伸長や低下を表すのか、それとも回帰効果に過ぎないのかの検証(回帰効果の評価)、3. 「複数回受験」の成績が大学入学後の成績をどれほど効率よく説明するのかに関する検証(予測的妥当性の評価)である。過去の能研テスト成績を分析した結果、1. 事前テスト(高校2年時)の成績と事後テスト(高校3年時)の成績との相関が決して低くなく、順位でみても7割の確率で結果が入



れ替わらない、2. 2回のテスト得点の差分があったとしても最大4割2分、平均で2割6分程度が回帰効果で説明可能である、3. 事前テスト(高校2年時)の成績を組み入れても入学後成績の説明率(寄与率)は向上せず低下することが分かった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

木村拓也・安野史子・荒井克弘「大学入学者選抜制度における「複数回受験」の研究--能研テスト昭和39年・40年連続受験者の得点分析」日本分類学会編『データ分析の理論と応用』6号、2017年3月、pp.3-19.【査読有】

木村拓也・林篤裕「個別大学から見た大学入試センター試験の頑健性--合否入れ替り率を用いた検討」全国国立大学入学者選抜研究連絡協議会編『大学入試研究ジャーナル』26号、2016年3月、pp.1-8.【査読有】

木村拓也・井隼経子・林篤裕「合否入替り率を用いた入試データの構造把握--主成分分析、共分散構造分析、重回帰分析、正準相関分析を用いた検討」『基幹教育紀要』2号、2016年3月、pp.95-113.【査読有】

〔学会発表〕(計6件)

木村拓也「総合的・多面的な評価の理論と実践」文部科学省教育関係利用拠点事業、アドミッション・スペシャリスト能力開発研修会(第1回)、九州大学(福岡県福岡市)、2017年3月23日。

木村拓也「面接・小論文入試の具体的な方法--テスト理論の観点から」大分大学入試FD、依頼講演、大分大学(大分県大分市)、2016年3月24日。

木村拓也「忘れられた「調査書研究」の嚆矢--国立教育研究所における「調査書研究」成果と意義」日本テスト学会第11回大会企画セッション、研究発表予稿集、pp.50-53、関西大学(大阪府吹田市)、2015年9月10日。

木村拓也・林篤裕「個別大学から見た大学入試センター試験の頑健性--合否入れ替り率を用いた検討」平成27年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会第10回大会、研究発表予稿集、pp.27-34、東京電機大学(東京都足立区)、2015年5月29日。

木村拓也「アドミッションセンターの系譜と現実--歴史的経緯と(個人的な)業務実態」、依頼講演、アドミッションフォーラム2014、琉球大学(沖縄県中頭郡)、2014年12月11

日.

木村拓也・安野史子・荒井克弘「大学入学者選抜における複数回受験に関する研究——能研テスト昭和39年40年連続受験者の得点分析」日本教育社会学会第66回大会自由研究発表、研究発表予稿集、pp.82-83、愛媛大学・松山大学（愛媛県松山市）、2014年9月13日.

〔図書〕(計2件)

木村拓也「学生募集戦略」岩崎保道編『大学の戦略的経営手法』、大学教育出版、2016年4月、pp.44-59.

木村拓也「大学入試の歴史と展望」繁樹算男編『新しい時代の大学入試』金子書房、2014年5月、pp.1-35.

〔その他〕

ホームページ等

九州大学教育計画・測定評価論研究室

<http://www.education.kyushu-u.ac.jp/~kimura/index.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

木村 拓也 (KIMURA, Takuya)

九州大学・人間環境学研究院・准教授

研究者番号：40452304